

**Association for Research on the Impacts of War
and Military Bases on Women's Human Rights**

「女性・戦争・人権」学会

ニューズレター 18号

2005年9月1日

はじめに

志水紀代子

敗戦後60年の今年8月に、「郵政民営化」に反対するものは味方にあらず、と、あのブッシュの二分法に習ったのか、それで民意を問うという総選挙の公示があったばかりです。アジア諸国との懸案事項である靖国参拝を、いかにも物分り顔で避け、憲法も教育基本法も故意にはぐらかせ、すりかえて、「民主的にみなさんの真意に応えているでしょう？」といわんばかりのあざとい小泉首相のやり口に、「この国の有権者」はまだ翻弄され続けるのでしょうか。「憲法9条・24条が、そして平和が消える！」という危機意識を、メディアも正面から取り上げようとしなさい。隣国から来て、アジアの平和を発信し続ける「ヨン様」に熱烈なエールを送るその人たちが、なぜこのもっとも重要な時期に、「いつか来た道」への舵取りをしようとするこの国の男たち（それに加担する女たち）の正体を見抜けないのか、暴走をなぜ止められないのか！と、苛立ってしまいます。

会員のみなさまにはいかがお過ごしでしょうか。

4月に学会誌7号をお送りした折に、4月8日付けのニュース番外編をお送りしました。そこで、韓国の「戦争と女性人権センター」と共同編纂で進めてまいりました「日韓女性による歴史教材」（本のタイトルは『ジェンダーの視点から見た日韓近現代史』（梨の木舎刊）です）が、8月に発刊予定と書いたのですが、残念ながら、諸般の事情で、10月に延期になってしまいましたことを、先ずご報告し、ご了承を頂かねばなりません。

これまで議論を重ねてきた成果として、当初の予定より、大幅にページ数が増えたこともありますが、それだけに最後の最後まで、ミスの無いようにという編集者の苦労を、どうかご賢察ください。特に日本側は、各章とも研究者から若い人たちまで、多くが執筆者として参加、プロジェクトが発足してからのこの4年間の苦労が、まもなく報われようとしています。いまま少しの猶予を頂きますよう、お願い致します。

さて、今年度の大会は10月30日の日曜日に、早稲田大学で開催されます。この大会では、学会のこれまでの総括と、今後の方向性について会員の皆さんといっしょに考えていくために、総会の時間を通常より多くとっています。

学会のこれまでの歩みを第1ステージとすると、この教材の発刊をもって第1ステージ

が一段落致します。日本のこのような状況の中で、今後第2ステージをどのようにしていくか、学会誌のあり方ともども、ぜひ皆さんの忌憚のないご意見・ご感想をお寄せください。事務局から、その第2ステージに向けての学会規約の改定案があります。投稿規定ともども一度お目通し頂きまして、ぜひ総会でご発言くださいますようお願い致します。

今後学会のHPを充実させ、メールで会員相互の意見交換がすみやかにできるように、システムを整えていく予定でいます。ご期待ください。

なお、少し変則的になりますが、2004年度の決算報告書を同封させていただきました。2005年度分の振込み用紙も同封させていただいています。もし行き違いになりましたらご容赦ください。なお、皆さんの振込みの受取証を持って、領収証に代えさせていただきますが、もし領収証が必要な方は、お申し出下さいませ。

なお、年会費は以下の通りです。

- * 維持会員 10000 円
- * 一般会員 6000 円
- * 学生会員 3000 円

学会事務局だより

戦後60年である2005年は、はや前半があわただしく過ぎようとしています。当学会が韓国の「戦争と女性・人権」センターとともに取り組んだ、ジェンダー視点からの東アジアの近現代史に関する3年間の共同研究と、1年を要した歴史教材の共同執筆も、ついに最終段階にきています。60数人の様々な世代、ポジションに立つ人たちが、現在の時点において可能な限り、歴史と交叉するHerstoryの記述に向けて全力を尽くした成果です。一国史を超え、ナショナリズムとは遠く離れた論点で、しかもフェミニズムの基本を踏まえた記述とするために、日韓の研究者間で、また各章内の担当者間で、あるいは個別的にと、様々な形の論争を経ました。

そのようなプロセスの中で、そもそも「女性・戦争・人権」学会のめざすものは何であったのか、その存在意義は何か、今後に向けての展望などの諸問題が浮かび上がってきました。「女性・戦争・人権」学会も今年で、1997年の発足以来8年目を迎えています。その間2000年12月に開かれた日本軍性奴隷制を裁く「女性国際戦犯法廷」という大きな出来事がありました。当学会の趣旨が「法廷」の理念と深く共有するところがあったこと、また会員の多くが「法廷」主催団体の一つVAWW-NET Japanの会員であったことも踏まえて、当学会は「法廷」開催を強く支援し、「法廷」の実現に積極的にかかわってきました。

「法廷」の素晴らしい成果を現実のものとし、ハーグ判決で世界に向けて掲げられた高い理念を普及していくこと、当学会の大きな目標となっています。そのプロセスの一つとして、日韓近現代の共同歴史研究、歴史教材編纂がありました。当学会の様々なメンバーが各章の

執筆作業に関わられたこと、それが20代から70代と各世代にわたっていることなどは、歴史の継承という意味においても、大きな意義があると考えます。9月中旬には発刊される予定ですので、ご期待ください。

しかしながら3年という準備期間はあまりに短く、いちおうの成果を出したものの、今後とも研究の継続が痛感されます。今度の主なる問題を以下にまとめてみました。

一つは、日韓だけではなく、東アジアの近現代という、政治的国境を超えて広がる観点の導入の必要性です。そのためにも、いっそう幅広く韓国研究者と交流していくこと、また中国・台湾その他の諸地域の研究者、アクティヴィストとの交流が必要です。

また著しい右傾化状況のなかで、フェミニズムの存在意義が問われる状況が起こりつつあります。「様々なフェミニズム」という曖昧な定義では済まなくなっている現在、当学会において、めざすべきフェミニズムの理念を明確に提起していく必要があると思います。近現代を問い直す様々な思想潮流が、相互交流・論争・発展的深化に向かうことなく、ゲットー化していく傾向が見られます。そのような分断状況を乗り越えて、ますます悪化していく政治状況に抗する思想実践が可能となる場を拓いていくことが重要です。

このような問題意識を明確にしていくために、当学会の運営委員会は、さる7月31日に次期第九回大会の総会において、規約の改正を提案することを決定しました。会員の皆様にも予め、その提案をお知らせいたしますので、総会当日あるいはそれまでにご意見を頂ければありがたいです。

(事務局案)

***当学会規約の目的を明確にするため、以下の提案をします。**

・ (設置目的)

本会は、「女性国際戦犯法廷」の思想的深化をめざし、フェミニズムの視点から、「女性・戦争・人権」に関する学際的研究を行い、性暴力・性差別および戦争・植民地主義を生み出す社会的・文化的・歴史的要因を解明し、それらの根絶に寄与することを目的とする。そのため以下のことに取り組む

- ①あらゆるナショナリズム・民族主義に抗する研究
- ②いかなる戦争・侵略・暴力をも肯定せず、非戦・非暴力の思想を構築
- ③家父長制一軍事資本主義の構造的暴力を根絶する思想実践
- ④性的人権を確立していくための、国際的ネットワークを拓く行為実践

次期大会は、当学会の「過去・現在・未来」を考え直す論争の場としたいというのが運営委員会の提起です。そのため午前中の総会では、規約の改正を含めた当学会の今後のあり方について議論し、午後の研究発表会は、出来るだけ多くの会員の意見交流の場としたいと考えています。その時のメイン・テーマは、「<法廷>以降の世界を考える・・・性差別・性暴力・人身売買撤廃に向けて」が提案されていますが、まだ再考の余地がありますので、皆様からのご提案を期待しています。また会員の方からの発言者を募集していますので、ぜひ

自薦・他薦をお願い致します。

また当日参加出来る方・出来ない方も、ぜひ事前に事務局宛にご意見を寄せて頂きたいと思っております。学会のさらなる発展のために、複数の方たちの多様な意見が必要だと思っております。また総会で役員の変更もあります。ぜひ学会運営に会員の皆さんの積極的なご参加を、お願いしたいと思っております。

学会誌『女性・戦争・人権』の <寄稿規定>の文章化の必要が議論され、編集担当の井桁碧さんから以下の案が提起されました。

『女性・戦争・人権』<投稿規定>案

1. 寄稿資格

本会会員の方は、自由に投稿できます。

なお、編集委員会は、学会の企画に基づき、非会員に寄稿を依頼することがあります。

2. 掲載決定方法

①投稿、依頼どちらの場合も、寄稿された原稿を掲載するか否かは、編集委員会で検討の上、決定します。

②検討の結果、著者に再考、加筆・修正等を求める場合があります。

③原稿（図表、写真、FDなどを含む）は採否にかかわらず、返却しません。

3. 枚数

寄稿原稿の枚数は（400字1枚として計算）、原則として以下のようになります。

論文：60枚＋欧文要旨（200～300語）

研究ノート：30枚

通信：10～20枚

書評：5～15枚

報告、その他

4. 投稿方法

① A4版用紙に印刷した原稿を、編集担当者に、3部提出してください。

②原稿を投稿する際には、連絡先（郵便番号、住所、電話番号、ファックス番号、お持ちの方はEメール・アドレス）を明記してください。

③提出先は、「女性・戦争・人権」学会事務局とします。

④掲載が決定された場合、完成原稿を、フロッピー・ディスクにテキスト形式で保存したもの、あるいはテキスト形式で保存したものをEメールに添付し、編集担当および出版社に送付していただくものとします。

5. 校正

検討の結果、掲載決定された原稿についての校正は、著者校正のみとします。校正段階での修正は誤字・脱字等、最小限に止めてください。著者校正の段階での大幅な加

筆や、修正がなされた場合、掲載を延期、または取り消しとする場合があります。

6. 寄稿に関する問い合わせは、「女性・戦争・人権」学会事務局宛にお願いします。

7. その他

本誌に発表されたものを「転載」する場合には、学会事務局にご連絡の上、出版物を一部ご寄贈ください。

現在第八号の原稿募集中です。締め切りは2005年末です。皆様の投稿を期待しています。ご計画をおもちの方はぜひ事務局にお知らせください。

(事務局総務 大越記)

※※※

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」が開館されました。

以下中原道子さんからのお知らせです。

8月1日に、特定非営利活動法人「女たちの戦争と平和人権基金」のアクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」が開館しました。これは、亡くなった松井やよりさんの遺志によるもので、多くの女性たちの有形無形の熱烈な支援によってつくられました。短期間で西早稲田のアバコビル二階に建築家富田令子さんの内装で、素晴らしい空間が出来ました。

女性たちがつづいた、戦時性暴力の被害と加害の資料を集めた、日本初の資料館です。第一回の特別展示は「女性戦犯国際法廷のすべて?「慰安婦」被害と加害責任?」がテーマです。入館者はまず日本軍性奴隷制の犠牲者の写真に迎えられます。小さな資料館ですが非常に簡潔でわかりやすい展示です。ここは小さな集会もできますし、資料を読んだり、ビデオをみたり、写真を見ることが出来ます。私は金曜日にボランティアで受け付け兼説明係りを9月からやる予定です。この資料館は開館以来、日本のメディアは沖縄及び共同通信の配信をのぞいて、完全に黙殺しましたが、館長の西野瑠美子さんは海外からのテレビをはじめ取材の対応に忙殺されています。すでに、この資料館については、イギリスの Sunday Times にも報じられましたし、私自身 BBC とスイスの新聞社の取材を受けました。私が BBC のインタビューで、日本のマスメディアはこの資料館のことは、報道しないと雑談で話したら、驚いてマイクを取り出してもう一度その話を繰り返してくれと言われました。BBC は、国民は聴取料は義務化されていますが、NHK の偏向放送とはくらべものになりません。政府にはきわめて批判的なスタンスを取っています。日本で NHK の聴取料支払い停止が 100 万世帯を越えたのも当然のことです。

この資料館は、女性たちが集まり、情報を交換し、常時活動する拠点になることを望んでいます。ですから名前も Active Museum「女たちの戦争と平和資料館」なのです。会員の皆様ぜひ一度いらしてください。(中原道子)

さらに、その後、私は、同行者を捜しに行かれた大越さんを待つ一人でいたとき、別の警備の男性から、「ここで何をしていますのですか」と聞かれました。微笑を浮かべながら質問され、「何で？ 私に」と思いましたが、「友人を待っている」と答えました。たぶん、私のこめかみには、小さい「×」が浮かびつつあったと思います。ところが、その男性は、さらに「これから、何を予定ですか？」と聞いてきたのです。こめかみの「×」は膨れあがっているようでした。「なぜ、あなたに、そんなことを答えなければならないのか？」と言いました。そのとき大越さんたちが戻ってきたので、それ以上の問答をすることなく、ふり向かずに二階席に行きました。

大型スクリーン、レーザー光線、CG技術を駆使したセレモニーはすでに始まっています。舞踊や琴の演奏の後、＜来賓＞者たちが舞台に招き入れられ、最前部中央に「大統領夫人」が着席しました。拍手が続くセレモニーの間、宗教学出身でもある私は、「セレモニーの社会的意味・機能」についてあらためて考えていましたが、先ほどの質問についても考えていました。「不審人物だったのか？」。その日、私は「黒」でした。上着もパンツも、そしてザックも。他にも大き目の荷物をもっている人もいたと思うのですが、私のザックが疑惑の対象だったのでしょうか？ だとしたら、「何を予定か」ではなく、「ザックの中身」を聞いて欲しかった。それとも、やはり「私が不審人物」だったのでしょうか？

「女性学のオリンピック」とされた会議と「わたし」

洪ユンシン

LOTTEホテルがおかしい。国際会議の前夜、ソウルに着いてはじめて目についたのは一流ホテルの壁に巨大な白い布が貼り付けられている不思議な光景であった。小泉首相の訪韓に備え、ホテルを飾っていた「ヨン様」の超大形の写真を隠すためのものであったことを知った。会議当日、「どの国にも歴史的な意見の差はありえる」靖国参拝などに対しての小泉首相の答えに韓国あちこちで反日デモが起こっていたが、女性会議は無事に「盛大なる開幕式」を挙げた。80ヶ国2500名以上のフェミニストたちが集まった場所で、大統領夫人は、「韓国の小児化問題を論じながら、韓国の女性家族部の意味」を強調する演説を行なった。

大会の二日目、22歳の兵士が上司の暴力的言葉に絶えず軍隊の中で銃撃を乱射する事件が発生。国内全体が軍隊の「軍気」問題と、精神的な苦しみに耐えない「このごろの若い男」についての議論に移っていた。

大会の三日目、日本大使館前で行なわれる水曜デモに世界女性学会議に参加していたフェミニストたちも駆けつけた。ホルモンたちの戦いに涙もろい感想が相次いだ。明らかに「外人」と見られる格好の女たちで構成された何人かのフェミニストが、韓国の伝統的なお辞儀（クンゾル）を行なった。翌日、伝統的なお辞儀をするフェミニストたちの姿はほとんどの主要日刊紙に報道された。新聞の一面に飾られたキャプションは「謝る世界女性」。

第9次世界女性学会議は、成功したと思われる。梨花女子大学の一年に及ぶ努力と、韓国

「女性部」の全面的な支援を受け、「われわれ」は静かに議論を進め、タイミングよく、新聞記事の一面で「謝る世界女性」となった。しかし、4日間韓国で起こっていた出来事に対して、私たちは、根本的なパラダイムの転換・提議をするには至らなかったことを言わざるを得ない。日本兵が侵した女性に対する暴力、米兵が行っている軍事暴力、そして、実際、韓国の軍の中で行なわれている様々な出来事に関しても、それを共に論じたはずの会議内容は公式化されずに沈んでいったのである。会議自体が、戦争とは全く関係なしで行なわれた「女性学のオリンピック」のように表象化されてしまったのではなかろうか。そして、せっかく集まった2500名以上のフェミニストたちの中の一人、わたしは、「東一西／南一北の境界を越える」ために、まだ「We」がそこまで必要なかを問われていた気がする。一体、「われわれ」とされるこの4日間の「祝祭」の不便さをどのように、表現すればよいのか、今ももどかしさを感じる。

お楽しみは後から

大越愛子

最近2年間世界会議のはしごをしていますけど、ソウルのが一番派手だった。とはいえ壮麗な儀式！にはほとんど出ていないのですが。こうした会議の楽しみは、久しぶりに色んな顔見知りと出会えること。日本内部では最近ほとんどお会いすることのなかった有名人、知人にも出会ったし。日韓共同プロジェクトで大阪に来られた方たちにも再会できました。

でも最大の収穫は、ソウル会議後光州の全南大学の女性学センターに呼んで頂いたことです。これは歴史教材で中原さんの章の相方をされたアンジンさんが、ホンユンシンさんと連携してセッティングして下さって実現したものです。急の研究会でしたが、関係者が15人くらい集まって下さり、中原・大越・井桁の順で発表。ホンさんが通訳されました。

私は、天皇制と母神アマテラスの関係を話しましたが、そこでハプニング。5. 18研究所研究員の方で日本学専攻をされている男性研究者が、「天皇制は儒教原理に基づいている」と反論され、激論になりました。私が母性原理を批判したことが気に入らないみたいで、間に入った全成坤さんはヒヤヒヤ。あとでアンジンさんやセンターのキム先生から、「ああした男性の教育は時間がかかるのよ」と、ここでもフェミニスト連帯。

翌日はアンジンさんたちが、車で光州民衆抗争の記念館や墓地などを案内して下さいました。多くの市民が国家暴力で残虐に殺された事件を決して忘れないという、光州市民の決意に感動しつつ、軍隊の恐ろしさを改めて痛感。闘う人たちの群像のなかに、やはり性役割が見られることなど、アンジンさんの研究とつながる問題もあって、いろいろ議論ができました。今後も様々な交流を続けることを約束しました。有意義なツアーを設定して下さい、ホンさんほんとにカムサハムニダ！

+++++

<会員が出された本>

***高橋哲哉著『靖国問題』ちくま新書**（はじめにより・・・私は歴史家ではなく、哲学者の端くれである。靖国神社がどのようなものであるかを知るためには、その歴史を知らなければならないが、本書のテーマはそこにはない。靖国神社の歴史を踏まえながらも、本書では、靖国神社とはどのような問題であるのか、どのような筋道で考えていけばよいのかを論理的に明らかにすることに重点を置きたい。）

***徐京植著『ディアスポラ紀行』岩波新書、**（後書きより・・・孤独な旅人が見やる方向は、<近代>へと続いている。進歩と反動が激突を繰り返したその途上で、近代国家が形成され、人々が<国民>へと編成され、植民地支配と<世界分割>が強行された。その道は二度の破局的な世界戦争と大虐殺に通じていた。およそ200年後のいま、私は、自分自身があの旅人のように独りたたずんでいると感じる。）

***森岡正博著『生命学をひらく』トランスビュー、**（はじめにより・・・死にゆく人の看護について、親子の愛情について、生まれてくるいのちの選択について、「引きこもり」について、気持ちよさを求めて突き進んでいく現代社会の姿について、私がいま考えていることを全力で語ってみました。「生命学」とは、それらの問題について、けっして自分自身を棚上げにせずに考えていくやり方のことです。）

***清真人著『ケーテ・コルヴィッツ』御茶の水書房、**（はじめにより・・・ケーテは、1867年生まれ、1945年4月、ナチスドイツの降伏する数日前に没した。彼女の作品には20世紀ドイツが生きねばならなかった最も苛酷な日々の記憶が、その希望と挫折と絶望が、しかしまた不屈な抵抗の記憶が、また憎しみを超えて人間が大いなる平和と和解に到達することへの希求が一身に刻まれている。）

***李修京著『帝国の狭間に生きた日韓文学者』緑蔭書房、**（はじめにより・・・本書は、近代の韓国の知識人・金基鎮の社会的活動と状況を異にする韓国・日本・フランスの3ヶ国の文学運動を結びつける思想的普遍性に意を用いて行った比較研究である。さらに金基鎮と周辺知識人の活動を明らかにするとともに、彼らの思想と行動を育んだ朝鮮・日本・フランスの社会の実態を、人々の職業分布や教育実態を含めた子細な統計資料によって描出することを試みている。）

***池内靖子・岡野八代他『労働のジェンダー化』平凡社、**池内「セックスワークの脱神話化？」金友子「日本軍性奴隷制と（再生産）労働概念の再一構築」岡野「労働の両義性とジェンダー化」（帯より・・・家事労働からセックスワークまで労働のなかの<女/男>を

ジェンダーの視点から分析する制度・言説・表象の政治学)

***藤原書店編集部編『歴史のなかの<在日>』藤原書店、宋連玉「<在日>女性の戦後史」**
(帯より・・・<在日>百年を迎える今、<在日>へのまなざし、その生活現場、そして歴史と未来を、気鋭の論者26人がつぶさに描く)

***岡本三夫他編『平和学のアジェンダ』法律文化社、ロニー・アレキサンダー「セクシュアル・マイノリティの平和学」**(おわりにより・・・セクシュアル・マイノリティは、性・ジェンダー・セクシュアリティに関する社会的な規範や固定観念に従っていないと見なされ、そこから偏見や差別が発生する。逆に言えば、それらの規範や固定観念を押しつけられることでセクシュアル・マイノリティの人々は傷つく。それらの傷は、冒頭で述べた「構造的暴力」の結果である。)

***ドゥルシラ・コーネル著、岡野八代他訳『女たちの絆』みすず書房、**(訳者あとがきより・・・世代を越えた女性たちのつながりの大切さとは、言い換えれば、過去や現在において、女性がいくつもの意味で抑圧され、言葉を見いだせないとしても、未来にようやく言葉となって帰ってくることを信じ、それを受け止めるということである。そうしたフェミニストの「寛容さ」を説く本書が、1人でも多くの人々に届く、「未来」への呼びかけの一部となることを訳者たちは心より願っている。)

紹介できていない本など、ぜひお知らせください。またこれらの本の書評を募集しています。

!!!アジア現代女性史研究会編『アジア現代女性史』が創刊されました。研究会は2004年4月に、大阪外国語大学のアジア関係の研究者や関わりの深いアクティヴィストを中心として、立ち上げられました。代表は藤目ゆきさんです。モンゴル・タイ・フィリピン、北朝鮮などの女性の状況に関する論文・レポートなどが寄稿されています。英語版もあります。関心のある方は、大阪外大藤目ゆき研究室にお問い合わせください。メール・アドレスは、Fujime@osaka-gaida.ac.jpです。

+++++

「女性・戦争・人権」学会第九回大会のお知らせ！！

2005年度は、歴史教材編纂プロジェクトへの全力投球、運営委員のソウル会議への参加・発表などの事情で、学術大会を春期に開催することができませんでした。おわびを申し上げます。この間、学会のありかたをめぐって様々な議論がありました。

そうした議論を踏まえて、10月30日に、創立以降8年を経た当学会の過去・現在・未来について、徹底的に討論するための大会を開催したいと思っています。まだ十分な準備ができていない段階ですが、現時点で明らかなことを、皆様にお知らせいたします。

日時 10月30日（日）

場所 早稲田大学国際教育センター22号館201号室

プログラム

10-12時 総会

「女性・戦争・人権」学会の歩み、現在、今後についての徹底討論、規約改正、委員の改選。

12-13時 昼休み

13-16時 パネル・ディスカッション

総合テーマ

「<法廷>以降の世界を考える・・・性差別・性暴力・人身売買撤廃に向けて」（仮）

パネリスト 韓国のNGO（交渉中）、伊田広行

菊地夏野・清末愛砂・ホン・ユンシン

その他、学会の今後に関心のある人たち

大会後 懇親会

+++++

編集後記

今年の夏も熱かった！！戦後六十年についての様々な言説が飛び交ったようだけれど、ジェンダー問題に関しては不十分だったと痛感。ところで9.11の選挙に向けての続々現れた「刺客」としての女性たち。男性社会を補完する女性たちの顔は、皆何故かワンパターンで、笑える。厚化粧をとれば、ひょつとして「オヤジ」？ いえいえ権力好きには性差はないってこと！！フェミニズムは、今こそ再定義が必要だね！！（〇）

∞∞∞

学会連絡先 E-mail ; info@war-women-rights.jp

HPアドレス http://www.war-women-rights.jp/

振替口座 00900-6-38551 「女性。戦争・人権」学会

〒577-0818 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学文芸学部 大越愛子研究室 TEL06 (6721) 2332 (代表)

+++++